

8104 哲学者は「存在するとは行為することだ」と・・・

　哲学者は「存在するとは行為することだ」という。凡人はその深遠な意味は分からなくとも、はるかに深刻に、働くなければ生きられないことを膚で知っている。しかも西と東と問わず、大国と貧乏国とを分かたず、失業は現代の病であるばかりでなく、将来への大きな不安を投げかけ、人類文化の基礎をゆるがしている。

朝日新聞（1月14日）

[許容訳例]

Philosophers say, "To exist is to act." Ordinary people may not understand the profounder meaning of this, yet know well that they cannot live without working. And whether in the West or the East, among the great powers or poor nations, unemployment is not only a contemporary disease, but arouses also a great uneasiness for the future and threatens the foundations of human culture.

[翻訳例]

"Existence," say the philosophers, "is action." The ordinary man may not understand the profounder implications of this statement, yet he knows intuitively something of far great importance to him—that one cannot live without working. And in both East and West, among great powers and poor nations alike, unemployment is not merely a contemporary disease but casts a great shadow of uneasiness on the future, threatening the very foundations of human civilization.

■哲学者は「存在するとは行為することだ」という。(8104)

★「哲学者」は、翻訳者の思い描き方によって、無冠詞複数(phiosophers), 定冠詞单数(the philosopher), 定冠詞複数(the philosophers)のいずれでも可能です。というのは「存在するとは行動することだ」という内容のことを言ったのは、デカルト, カント, モンテニー, その他, 何人もいるからで、全員を思い描いてもよいし、特定の誰かを念頭においてもいいからです。

★「存在するとは行為することだ」ですが、どの哲学者がどういう意味を含めて言ったのかわからないので直訳するしかありません。それでもちょっと大変です。たとえば、To exist is to act. とすると, to-Inf.は基準になる時点以降のことを表すので, To-Inf. is to-Inf.は「・・・すると当然の結果として・・・になる」という意味にもなります。たとえば, To see Nikko is to say kekko.は「日光を見たら必ず結構と言うことになる」という意味です。したがって, To exist is to act. と言うと「存在するものは必ず行動を起こす」という意味にもなるわけです。ここは Existence is action.あるいは Being is action.くらいでいいのではないかと思います。

■凡人はその深遠な意味は分からなくとも、はるかに深刻に、働くなければ生きられないことを膚で知っている。(8104)

★「凡人」はいろいろあります。ordinary[average] people[man]の他に ordinary person [mind]とか、ちょっと文語的ですが the common[general] run of men など。

★「その深遠な意味」の「その」は「存在するとは行為することだ」ですから of this あるいは of this statement です。its にすると何をさしているのかわかりません。

★「深遠な意味」ですが、「分からぬ」と言いながら「膚で知っている」と言っているので、哲学者の言っている深い意味は分からぬけど、全然分からぬわけではない、ということで、「深淵な」に度合いがあることになります。したがって、単に profound meaning ではなく profounder meaning と比較級しなければなりません。なお、「意味」は implications も使えます。

★「分からぬとも・・・」は「分からぬかもしれないが・・・」ということで may not understand…, yet…でしょう。but では少し弱いように感じられます。

★「はるかに深刻に」は、やっかいです。日本人の読者としては分かるのですが、英語的には、この部分は前後と関係なく浮遊しているからです。筆者は文末の「知っている」と続けたかったのでしょうが、「深刻に知っている」という日本語はありません。ここで言いたかったことは、たぶん、「凡人にとってはその深遠な意味は頭では分からぬとも、はるかに深刻な〔重要な〕こととして一働かなければ生きていけないということを一膚で知っている」と言いたかったのだろうと思います。したがって、know something of far greater [more immediate] importance of him(=the ordinary man)とでも言い換えなければなりません。

★「働かなければ生きていけない」は cannot live without working でしょう。

★「膚で知っている」に相当する英語の表現はありません。辞書にも「膚で知っている」はないのですが、「膚で感じ取る」はあって get the feel of…with the skin と出ていますが、こういう言い方(with the skin)はありません。get the feel of… は、たとえば、get the feel of him と言うと、「つきあっているうちに彼がどんな人物なのかわかつてくるだろうからつきあう」という意味になります。要するに「膚で知っている」は「理屈でなく直感でよく知っている」ということですが、know well では弱すぎるので、know intuitively とか know instinctively とかにすると、「膚で」という日本語とは一致しないかもしれません、英語の表現としては自然になります。

■しかも西と東と問わず、大国と貧乏国とを分かたず、失業は現代の病であるばかりでなく、将来への大きな不安を投げかけ、人類文化の基礎をゆるがしている。(8104)

★「しかも」というと moreover を使いたくなりますが、ここでは論理的なつながりがはつきりしないので and くらいでいいでしょう。

★「西と東と・・・」ですが、「哲学者・・・」という話なので、筆者の意識下に西欧があつたのでしょう。それで「西と東」と「西」が先になったのでしょう。日本語では、普通は、たとえば、「洋の東西を問わず・・・」のように「東」が先です。英語でも普通は whether in the East or the West と言います。それから定冠詞はなくてもかまいません。英語では、単独では冠詞を付けても、熟語になったり、意識のどこかで熟しかけていたりすると、たと

えば from morning till night のように冠詞が落ちます。

★「大国と貧乏国」ですが、たとえば、「経済大国」は an economic power と言いますから、ここは the great powers or the poor nations でしょう。ここも冠詞はなくてもかまいません。「不特定複数の大団と貧乏国」です。なお、big country は面積が大きいことを言うので、ここでは使えません。

● 「A [と] B [と] 問わず、C [と] D を分かたず」

「問わず」と「分かたず」を訳すなら、whether in the East or the West alike, equally among the great powers or the poor nations のようになりますが、whether in the East or the West, among the great powers or the poor nations でもほとんど同じです。なお〔と〕ですが、whether を使うと Whether A or B ですが、使わなければ or ではなく and でもかまいません。たとえば、in both East and West, among great powers and poor nations alike のように。

★「失業」は unemployment です。辞書には loss of employment も出ていますが、これは個人が失業したことを、たとえば、Loss of unemployment is a great shock, especially to the older man. というように使います。ですから、使えないことはないのですが、強いて使う必要もないと思われます。また Joblessness も出ていますが、これはある特定の人が仕事を持っていないことを言うのです。たとえば、She likes him, but his joblessness bothers her. というように「ちゃんとした仕事を持っていないことが気になる」というように使うのです。

★「現代の病」は a contemporary disease がいいと思います。a modern disease, 特に the modern disease というと今までになかったということで、あくまでも昔と比較して言うことになります。たとえば、This is not only a modern disease but one that has existed from prehistoric times. (現代だけでなく先史時代からあった) のように。なお、contemporary の代わりに present-day は使えません。これは「このごろに；最近の」あるいは「現在の」という意味です。それから、disease の他に sickness でもいいです。illness は具体的な病の場合に使うものです。

★「・・・であるばかりでなく・・・」は not only[merely]…but (also)…です。

★「将来への大きな不安」は「将来どうなるのだろう」という「将来に関する不安」を言っているのですから great uneasiness [apprehension] on the future です。great uneasiness [apprehension] in the future は「将来生じる大きな不安」で、ここでは駄目です。

★「(不安を) 投げかける」は cast a [the] shadow of…という決まり文句があります。これを利用すると cast a great shadow of uneasiness [apprehension] on…となります。なお、cast の代わりに throw も使えます。

★「人類文化」は、そのまま訳すと human culture で、これでもいいですが、culture は人なら「教養」ですし、国なら「その国を持っているいろいろな風習・生活様式など」、つまり、身についた知恵です。進化とともに人間が作り上げたものという場合には civilization の方がいいように思われます。

★「基礎」は「土台」のことですから foundation ですが、建築物の基礎には積み上げると

いうイメージがあるので複数にするのが普通です。

★「ゆるがす」は、実際にゆらゆら揺れるわけではないので、shakeとかswing; swayなどは使えません。ここはthreaten（脅かす）くらいでいいのではないかと思います。